

ツツジにおけるツツジグンバイの寄生性の種間差異とその要因について

吉松英明 (大分県温泉熱利用花き園芸試験場)

Hideaki YOSHIMATSU : Parasitic Difference of
Stephanitis pyrioides and the Factor to Azaleas

ツツジグンバイがツツジの種により寄生性に差があることは一般的に言われているが、その実態及び要因については、これまで明らかにされていなかった。そこで、ツツジの種によるツツジグンバイ成虫の寄生性差異と、その要因について検討したので報告する。

1. 材料及び方法

1) 供試種は‘マルバサツキ’他22種。さし木は、1986年7月に行い、同年に3～4号鉢に鉢上げした。

2) 被害率は1987年8月13日に1株ごとに葉数、被害葉数、また被害度については、中位葉20枚(ただし、全葉が20枚に満たないものは全葉)について調査した。1種5株。

3) ツツジグンバイ成虫の寄生性は、各供試種について1988年6月11日、6月21日、7月1日、8月25日に各株に寄生している成虫数を調査した。1種5株。

第1表 ツツジグンバイのツツジ種別寄生差異と
ツツジの葉裏の毛じの長さ及び密度

和名	株当たり寄生成虫数		毛じの長さ μm	毛じの密度※ 本
	6.21	7.1		
マルバサツキ	4.8	6.0	858.9	17.9
サツキツツジ	2.6	7.0	940.8	3.5
オオサカズキ	8.0	8.0	884.5	1.3
オタクミツツジ	17.4	16.6	669.4	0.6
サツマクレナイ	6.2	11.4	783.4	4.9
ヤマツツジ	2.5	3.3	711.7	4.6
ミゾメキリシマ	6.6	8.4	1,031.0	1.4
シキヤマトツジ	3.0	6.6	782.7	8.6
ミヤマキリシマ	18.2	18.0	949.8	0.9
モチツツジ	0.6	0.8	1,033.0	15.3
セイガイツツジ	0	4.5	574.1	15.1
テボタン	2.7	5.3	947.2	12.6
シガツケラマ	12.6	13.6	826.2	3.4
リュウキュウツツジ	3.4	7.2	839.7	4.1
キンモウツツジ	0	0	2,288.0	14.7
オオムラサキ	3.2	5.8	1,012.5	8.6
ウドオオムラサキ	9.0	14.8	731.5	4.6
キシツツジ	3.4	3.2	994.6	21.6
サタツツジ	15.3	16.8	619.5	4.0
ケラマトツジ	3.0	6.6	685.4	7.2
トウツツジ	9.6	4.8	993.3	0.4
ヨドガワツツジ	18.4	25.8	717.4	3.8
チョウセンヤマツツジ	17.0	16.2	781.4	1.3

注) ※1視野(10×10)中の本数

4) 毛じの長さ及び密度は、各供試種の中位葉から2葉ずつ採取し、毛じの長さ及び密度を調査した。長さについては1葉から10本、密度については、10×10の倍率を1視野とした顕微鏡下で本数を調査した。1種10視野。

5) ツツジグンバイの口吻は、顕微鏡下で成虫の口吻の長さを測定した。10個体測定。

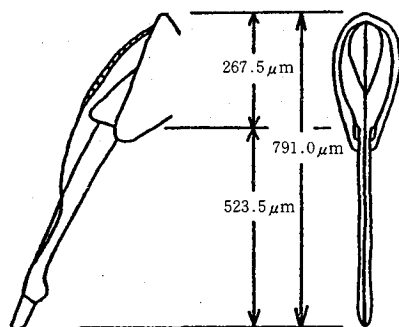
2. 結果及び考察

1) 被害葉は、‘キンモウツツジ’を除き、すべての種で認められ、ほとんどの種では50%以上の被害率であった。特に‘ヨドガワツツジ’‘オオムラサキ’‘オタクミツツジ’‘テボタン’等で被害率が高く、‘オオサカズキ’‘マルバサツキ’等で低かった。被害度は‘ウドオオムラサキ’‘シキヤマトツジ’‘ヨドガワツツジ’等が高く、‘トウツツジ’‘マルバサツキ’‘ヤマツツジ’等で低かった。

2) 4回の調査を通じ成虫の寄生が多くみられた種は‘ヨドガワツツジ’‘ミヤマキリシマ’‘オタクミツツジ’等で、‘モチツツジ’‘ウンゼンツツジ’‘キシツツジ’等は少なかった。また、‘キンモウツツジ’は全く寄生がみられなかった。

3) ‘オタクミツツジ’‘ヨドガワツツジ’‘チョウセンヤマツツジ’‘サタツツジ’等は、ツツジグンバイの口吻の長さよりも毛じの長さが短く、密度も粗であった。‘キンモウツツジ’‘モチツツジ’等は毛じの長さが口吻より長く、‘キシツツジ’‘マルバサツキ’‘モチツツジ’等は密度が密であった。このことから、ツツジグンバイの口吻より毛じの長さが短く、密度が粗な種ほど寄生性が高く、毛じの長さが長く、密度が密な種ほど寄生性が低い傾向があった。また、毛じの長さが短くても、密度が密な種は寄生性が低い傾向があった。

以上よりツツジグンバイの成虫の寄生性は種により明らかに差があり、その要因は毛じの長さ及び密度が大きく関与していると思われる。



第1図 ツツジグンバイの口吻